

令和2年春季号 (Vol.79)

- Training in Tough Times
 厳しい時代のトレーニング (P2)
- 常に探求し続けなければ...(P5)
- 身体の変化について (P7)
- 六道輪廻のお話 (P8)
- 自然物に宿る不可視の力 (P9)
- 昇段・Dan Grading (P11)
- 体は広い・基本を螺旋に...(P12)



力 必 達

今回はこれまで触れることが無かった政治に関する話題を入れての手記です。

現在、中国武漢コロナウイルスの感染が全世界へと広がりを見せています。一日も早い抗体ワクチンの開発が待たれていますが、コロナウイルス自体の変異が確認され、特効薬の完成までにはまだまだ時間がかかるようで、社会生活への悪影響が世界規模で心配される状況になっています。

黒死病、アジア風邪、川崎病、マーズ、サーズ、黄砂・PM2.5 (大気汚染)そして今回の武漢ウイルスの発生は中国共産党・中華人民共和国 (China) が元凶です。又現在、世界的な問題となっているチベット・ウイグル・南モンゴルの民族浄化、香港への強権発動、台湾への脅しなどの政治問題も同様に中国共産党の覇権主義によるものです。

そして、今回の武漢ウイルス感染で今更ながらに驚いたことは、中国共産党による日本の政界・財界そしてマスメディアへの浸透工作の常態化、サプライチェーン (個々の企業の役割分担にかかわらず、原料の段階から製品やサービスが消費者の手に届くまでの全プロセスの繋がり) の China 依存度の異常な高さです。

さて、私は、先代 (千歳翁) が著述された教本で解説された「空手の起源は古代中国の仏教寺院の拳法にあり……」の内容を信じ、千唐流空手の稽古に励む傍らで嵩山少林拳や他の中国拳法に興味を持ち時々隠れて練習をしていました。そして、平成8年(1996)、呉林俊君 (中国福建省) の案内で夢にまで見た嵩山少林寺 (中国河南省) を

表敬訪問、「釈永信上人」より「千唐流空手道」を承認する証しとして、「達磨禅師」そして「無量寿仏」二幅の掛け軸を拝領するに至りました。



— 山内_呉 林俊君_私_釈永信上人_ 釈延龍さん —

その頃の私は、先代の空手を正しく継承することを至上としていたので、嵩山少林寺・釈永信上人からのご配慮は、千唐流そして私にとって大きな荣誉でした。

私はそれ以来、嵩山少林寺で意気投合した釈延龍さんへの尊敬の念を持ちながら、少林拳の思想や套路 (稽古法) や導引術を勉強し、それが10年後のガンフー挑戦に結びついていったわけです。

呉君に案内してもらった上海～洛陽～福州では多くの人達との出会いがあり、私達はとても楽しい時間を過ごし、いくつもの素晴らしい思い出を作ることができました。今思えば、その当時“反日”と言われるような事象に巡り合うことなど全くありませんでした。それが何故現在のよう状況になってしまったのでしょうか?とても残念です。

私は今、中国共産党と組んで、日本の歴史と祖先を貶(おとし)め、日本の国益を無視して暗中飛躍している国内の政財界やマスメディアの中に巣食う腐りきった連中の愚劣な根性に、…心底腹が立っています。



— 黄檗宗禅師との交流演武 —



— 胡之剛君の犬拳 —
(福州市石竹山美術学校)

15 年前より天真正自源流上野景範先生御一門とのお付き合いが始まって以来、私は、天真正自源流と唐手の系譜や技法のつながりについて、日本の近現代史の再勉強と並行して研究を重ねました。その結果、それまで寄せていた中国武術への幻想を断ち切るに至り、次に、空手のルーツは剣術とそこから派生した格技(相撲)にあることを確信したのです。

その理由について、以前にも述べましたが大事なことなので改めて二つ程紹介します。

- (1) 琉球王朝 [宣徳 4 年・永享元年(1429) ~ 光緒 4 年・明治 12 年(1879)] の公文書には万葉仮名が使用されていた。

これは、沖縄県立博物館・美術館の歴史展示室で

初めて知った事実で、書の練習に「変体仮名」を取り入れている私にとっては、琉球王朝は室町幕府が統治した室町時代(1336~1573)から交流があったのだ……という新鮮な驚きでした。

- (2) 『敵は屈強で、戦いの中においては、これまでに見たことのない武器で応戦され、最初は相当数の被害を受け撤退を余儀なくされた。そこで密偵を送り込んで敵の陣容を掌握、その後綿密な作戦を立て攻め入った。』

(自源流の文献・琉球侵攻時の記録)』

これは私が、上野景範先生から直接伺った話です。私は先生との初対面の時「あなたの祖先と戦っていますよ」といきなり話されてきたので、とても驚愕し、それが強い印象として残った事を覚えています。

その裏付けとなるのが、坂東忠信(外国人犯罪対策講師、作家)が述べていることです。

「沖縄の首里城や他の城からは、南北朝から室町時代に用いられた筋兜や鎧が出土している。その事実から推し量るに、当時の琉球士族は戦国時代(15~16世紀)の武家に匹敵する、勇猛で高い戦闘能力を持つ集団に組織化されていたと容易に想像ができるのではないだろうか。」

今の私は、上述した事の再確認あるいは昨年起きた首里城焼失の件等で、従来の沖縄空手への盲目的追従の考え方を止めました。そして、翁先生が遺した空手(首里手-那覇手-唐手)を、自分の考えを織り交ぜながらも古流(古伝)の形技法を継承し、次代へ伝え残していくことが私に課せられた宿命、との考えを新たにしているところです。



落立(おちだち)神社は、永正 5 年(1508 年)に再建された神社です。御祭神は伊弉册命(いざなみのみこと)で、子授安産、防火の神様といわれ、身体健康・良縁成就のご利益もあります。参道には、横綱・千代の富士や巨人軍監督・藤田元司の奉納板が並んでいます。



夜神楽の中に岩戸開きの神話を表現した「伊勢」「柴引き」「手力雄」「鈿女」「戸取り」「舞開き」という舞があります。その最後の舞「舞開き」はこの世が再び明るさを取り戻した喜びの舞で、両手に月と日を表す鏡を持ち祝い舞う、「春の余祝の舞」ともいわれます。(福田 脩)



Training in Tough Times

Canada, like many other countries, has been hit hard by the coronavirus. In order to slow down the spread of the virus, many businesses have been told to close down and people have been told to self-distance themselves—that is, to keep their physical distance from other people as much as possible.

This, in turn, has meant that Ryusei Canada has had to close down our dojo, as many of our members shut themselves into their homes for how long we do not yet know. While we all understand the necessity of this, the situation imposes a lot of hardships.

Some of us have lost our livelihoods, making our financial survival precarious. And parents are faced with the challenge of keeping their kids home, isolated from their peers and unable to go to school.

Such a time calls for courage and to try to find ways to achieve a sense of normalcy for ourselves and the people close to us. For my part, I have found a great source of comfort in my training. It demands a focus that makes anxiety about the future and worry about the welfare of family and friends disappear for a while.



— Barrie dojo —

I realize that the parents in my dojo face a hard time to keep their kids occupied. So I have set up a private Facebook group for my students and have begun twice a week to teach lessons through Facebook Live sessions. While this is not the same as a class where we are all physically present, it does give the kids something constructive to do and keeps the student-teacher bond alive.

In the meantime, I also must give thought to how to encourage the training of my adult students, who may be preoccupied by the financial, health and family challenges of the pandemic. And I am also trying to reach out to the other teachers of our dojos to make sure they and their students are OK, and to see if there is any support I can give them.

Although I am currently quarantined in my house for 14 days because I have flu symptoms, I am lucky because I have a partner, Ruth, with me, and a nice place to live and train and meditate. I realize not everybody is so fortunate. I am trying as much as I can to phone people I know to see if they are OK, especially if they are alone. Sometimes just giving an isolated person a chance to talk about anything they want can provide a much-needed outlet and a sense of connection.

If I were to name the most important aspects of my training, I would say they are compassion and discipline. I hope that everyone in the larger Ryusei family stays healthy and safe.

Peter Giffen

—*Ryusei Karate-Do Canada*

厳しい時代のトレーニング

龍精カナダ 錬士 Peter Giffen

カナダは、他の多くの国と同様に、コロナウイルスによって大きな打撃を受けています。ウイルスの蔓延を遅らせるために、多くの企業は閉鎖を、そして、一般の人々にも個人間の物理的接触の距離をできるだけ離れて保つように言われています。

多くの龍精メンバーはその情報を知らされぬ内に家に閉じ込められ、それは龍精カナダの各道場を閉鎖しなければならなかったことを意味しています。私たちは皆、この必要性を理解していますが、この状況は多くの困難を強めています。

私たちの中には、仕事を失い経済的存続を不安定にしている人もいます。そして、両親は子供たちを家に置き、多くの子供たちは学校に行けないという課題に直面しています。

このような時、私は自分自身と身近な人々のために勇気を求めそして平常心の維持を呼び掛けます。その中で私は、将来に不安を抱え、家族や友人の幸せが消えてしまうことがないようにとトレーニングを通じて快適な素晴らしい情報源を見つけるよう努力したのです。

私は、道場の両親の方々が、子供たちの世話に苦労していることを理解しています。そこで私は、生徒

のためにプライベート Facebook グループを設定し、週 2 回、Facebook ライブセッションを通じてレッスンを開始したのです。それは、私たち全員が物理的に存在するクラスと同じではありませんが、子供たちに建設的な何かを考えることを与え、生徒と教師の絆を維持しているのです。

その間、私は、パンデミックによって、家族の健康面や経済面の問題解決に追われているかも知れない一般の道場生の練習方法についても考え、そして又、他道場の指導者達と生徒たちに問題がないか、あるいは彼らに与えることができるサポートがあるかどうかを確認しています。

私は現在インフルエンザの症状があるので 14 日間の待機状態になっていますが、パートナーのルースと一緒に暮らし、練習そして瞑想するのに良い場所があるので幸運です。しかしながら私は、誰もがそんなに幸運ではないことを認識しています。私は知人の人達に電話をかけて、彼らが大丈夫かどうか、特に彼らが一人であるかどうかを確認するためにできる限りの努力を行っています。それは、もし孤立した人がいた場合、彼らが欲しいものについて話す機会を与えるだけでも孤独感の払拭ができると考えるからです。

私のトレーニングの最も重要な側面を挙げるとすれば、それは「思いやり」と「規律」です。龍精メンバー (家族) 皆さんの健康と安全を願っています。(和訳 坂本)



長崎県平戸市西部の海岸線はほとんどが断崖ですが、中でもひとときわ不思議な形をしているのが「塩俵の断崖」です。この奇岩は柱状節理とよび、溶岩台地の上に玄武岩が重なって垂直方向に亀裂が入って五～七角形の断面を作ることにより、柱がいくつも立っているような形になります。さらに南北に 500m、高さ約 20m の規模があり、その見事な景観は、長崎県新観光百選にも選ばれています。

右は 100m ほど切り立つ断崖の上に立つ白亜の灯台。360 度パノラマで展望でき、雄大ですばらしい景観を満喫できます。夕暮れ時ともなると水平線に沈み行く夕陽に灯台がオレンジ色に染められていくのです。(福田 脩)

常に探求し続けなければ真似できない技を 持ち 小兵でも他を圧倒する

宗運道場 師範代 甲斐 隆

コロナウィルスの感染拡大で、武道場が休館措置となり自主稽古を余儀なくされている今日ですが、今までの稽古動画を振り返りながら、技の維持研鑽に努めていきたいと思っております。

さて、最近暗いニュースばかりの中で徐々に感動を覚えたニュースを見ましたので紹介します。それは岡野 功氏が全日本男子チームに特別講義を行い、76歳と思えぬ鋭い動きに選手はもちろん強化スタッフも興奮気味であったとのニュースです。岡野氏は1964年の東京オリンピック中量級を制し、**体重80キログラムの小兵ながら体重無差別の全日本柔道選手権に2度優勝**、栄光の「三冠(五輪、世界選手権、全日本選手権)ホルダー」です。



相手の技を誘い、体を後に捌きながらの左体落とし

「崩し」をテーマに約1時間半にわたって技術指導が行われた。「反動の崩し」、「後の先の崩し」、「連続技の崩し」、「足の振り上げ動作を使った崩し」など、紹介される技術はいずれも柔道の妙味がたっぷりであり、さりげない動き一つ一つにも極めて高い技術と豊富な経験が詰め込まれていた。

「きょうは『崩し』を考えてみましょうか」との一言から始まった講習は、「反動の・・・」、「後の先の・・・」、「連続技の・・・」、「足の振り上げ動作を使った・・・」へと進む。

「反動の崩し」では相手の反応を利用した左一本背負投と右背負投、右大外刈を紹介し、「ちょっとやってみよう」と実際に打ちこみをさせながら選手を指導。選手の求めに応じて右小内刈と右大内刈も例

示した。さらに、「手だけではなく、動きも崩しに使う」と横移動、円運動、逆の円運動、前への追い込み、継ぎ足で下がる、と自身の移動を使って相手に反動を起こさせる動きを紹介。ご自身「今はこういう動きはなかなかない」と語られた通り、現代の競技柔道ではなかなか見られない発想と動き。

岡野功氏コメント

いま、階級が非常に小刻みですね。また、選考に至る過程を見ても、試合が非常に多い。国内外を問わずにルールもしょっちゅう変わっている感じがしますし、これは選手としては大変だなと思います。新しいことを学ぼうとしてもすぐに次の試合がありますから、中途半端で終わってしまう。新しいことを作っていく余裕がないんじゃないかなと思います。そういった色々な事情で、**技が単純化されて勝った負けた、にこだわった柔道を互いに繰り返している**。たとえば柔道着というのはもともと着物から生まれてきているわけで、たっぷり感があって。これが柔道の個性、面白い技に繋がっていたわけです。ところが、今は背広の柔道着とっていいくらい、袖ばかり長くて全体が体に密着していて、技術の幅を狭めてしまっている。これでは柔よく剛を制するという柔道も生まれてこない。そういう余白といいますが、例えば身につけているものに余裕があれば、もっといろんな面白い技も出てくると思うんですけどね…。

岡野氏は現在76歳、こう言うてはなんだが、残された時間は決して多くない。その中であって自ら体を動かし、身をもって解説する機会がいかに貴重なことか。

その貴重な場であってなぜ氏が敢えて得意技の解説ではなく、体捌きをこの日の講義の主軸に据えたのか。なぜ貴重な講義時間を割いて、現代柔道のルールでは使えないはずの掬投や蟹鉗(足を振り上げる動作の崩しの項で紹介した)を解説したのか。

自分の系譜に連なる日本の代表選手たちに、己がすべてを掛けて打ちこんできた日本柔道とはこうだと示さんがためであろう。なんとしてもこれを伝えねばという強い思いと覚悟が、その一挙手一投足にあふれていたとあります。

試合映像があふれ、技術の相互研究が激しい国際柔道にあって、「技」自体の精妙さで勝負してきた日本のアドバンテージは減じつつある。投技の手練れが増え、これぞ日本という技術の代表格だった足技の

巧者もまったく珍しくなくなっている。その中であって、**外国勢が容易に真似することのできない次の領域、頼るべき日本の資産**はここにあるのではないだろうかと解説されています。



— 岡野先生より捨て身小内払いの指導を受ける炎鵬関 —

炎鵬関について

大学を卒業して角界入りした彼は今、「炎鵬晃」の四股名で今場所の大相撲の土俵を沸かせている。周りよりひととき小さな体格だが、絶対に侮れない存在だった。小兵にありがちな、小技がうまくて何をかわからない、という選手ではなかった。小さな体のなかに確立された強さがある選手だった。

その1：技術力の高さ

分かりやすいところでは、多くの人を驚かせた、初場所の阿炎戦での豪快な「足取り」。相手の片足を両手で持ち上げて倒すというこの技は、そう簡単に繰り出せるものではない。どんな技も「とにかく思い切りやることを心掛けている」という。細かい技術を見ても、立ち合いから左右に動いて相手の真正面に体を置かないようにする、腕を手繰ったり肩透かしにいたりすることで相手の体勢を崩す、ケガしてもそれをカバーするための戦略の巧妙さなどあらゆる能力が高い。

その2：体幹力と柔軟性

もう1つ注目したいのは、彼の体幹の強さ。

本人は「いや、体幹はあんまり強くないと思います」と謙遜しているとの事だが、本当に弱いのであれば巨漢力士に押しつぶされてしまっているはずだ。

相撲を取っているときの彼は、なぜか華奢だとか



脆いなどとは感じさせない。おそらく体幹がしっかりしていて、大きな相手にも押し負けず立ち向かえる身体の芯の強さがあるからだと考える。

そこでつながってくるのが、同部屋の先輩力士・石浦関です。

「重さを求めるより、使える筋肉を鍛えるようにしています。マシンだとターゲット部位が限定的なので、スクワットなどのフリーウエイトが中心です。そのほうが、足の先から全身に力を伝えることの強化になるので」。

もちろん、稽古で流す汗があつての筋トレではあるが、フリーウエイトが体幹を、ひいては全身の筋肉を鍛えていることは間違いのないと言っていいでしょう。

その3：最新の栄養学を採用

食が細くなかなか量を食べられない炎鵬は、大きくなる為にただやみくもにたくさん食べる努力の仕方では無い。「体重が大きく変動すると、取り口が変わってきてしまいます。たとえば99Kgでも、体の中身が良ければそれでいいんです。数値より質を重視しています。」と、力強く話しています。サプリメントの力も借りているのだという。

一流とは、土俵の上だけではない。土俵を降りたところでの生活もまた、一流としての過ごし方が求められているのだと徹底しています。

そこで我々が常日頃稽古に打ち込んでいる変手（受け手、掛け手、取手から変化する組手技）ですが変手の稽古の中に『さばき』『いなし』『崩し』は当たり前ですし、炎鵬関の捨て身の小内払いは、変手の技⑩の『内足車』が、先日坂本先生より指導頂いたものと同じ動きではないかと思いました。肘詰めから腕馴への差し手一極めから内脚刈りの一連の流れの中に同じとみてとれる動きがあります。

他の武道や体幹を意識した動きにも着目しながら、小兵でも他を圧する技の習得に励みたいと思っています。今後はコロナウィルスの一刻も早い終息を願いつつ世界の安寧を祈ります。当たり前の状況が当たり前で無い事を実感しつつも早く稽古再開できる日を待ち望んでおります。



身体の変化について

宗運道場 四段 福田 脩

サイドで上下打ちからの扇打ち・返し打ちの稽古ですが、最近では鏡を見ながら頭の位置が変わらないように注意しながらするようにしています。きっかけは、ダンサーの人が、踊る際に腰は動かすが頭の高さを変えてはいけないと言っていたのを思い出し、そういえば空手でもそうだったなあ・・と今更ながらに気付いた事がきっかけです。

いつの間にか、それを忘れて無意識にやっていたことなのですが、いざ、それを意識してやると、不思議と色々な気付きが出てくるものです。なので、形を稽古する際も、それを意識してやるようになってきました。

当然、身体を重力に任せて落としながらやるわけなのですが、これが意識して高さを変えないようにしようとすると途端に難しくなり、面白くなってくるのです。

それを毎日毎日続けていると身体の中が変化してきます。同じ動作をやっているつもりなのですが不思議と身体感覚が毎日変わるのです。

どういふ変化かというと、日増しに身体の各部が細かく分かれて行って細分化していくような感覚です。不思議な感覚なのですが、今の私は、身体の何処に意識を置くかで同じ動作をやっているでもその動きがまるで変わってしまう・・というのを実感しながらやっています。

あとはテンシンの交差立ち下段受けからの突きの稽古です。これも同じように頭の高さを変えないように注意して行っています。

この動作だけを繰り返し・繰り返し行くと、身体の

中心から練りこまれていくような感覚に襲われます。この動作は体力の消耗が激しいので身体がこなれていくまで徐々に回数を増やせばいいかな？ っという感じで稽古をしています。

その時その時の限界に挑戦するよりも、稽古を続ける事の方が大事と思う昨今です……。

見つめなおすいい機会

最後に、今このコロナ感染の時期は自分を見つめ直すいい機会だと思っています。

熊本地震の時もそうでしたが、こういう機会に自分自身は何をするかで、色々な事が見定められ決定していくのだと思います。

余談ですが、世界的にウイルス禍が起きている今、私が仕事をする山から見た風景がいままでより清んで見えるのです。皮肉な事ですが、自然にとっては良い影響となっていると感じ、同時に、人間が自分勝手に犯した自然に対するつけを払う時が来たのかも知れないと思うのです。

それから、私には何故武道館を閉鎖するのか？その事の意味が分かりません。普通、感染した人は、武道館に稽古には来ないでしょう……。

マスクをいくらかした所で、人混みに入れば意味はありませんし、そのマスクがいまだに店に並ばないのもおかしな事です。裏で正規ルートよりも高く売ろうとする者たちの策謀によって店に並ばないのではないのでしょうか？

私は、そんな物に頼るよりも、武道館で武道を稽古して、ウイルスに感染しても太刀打ちできるような健全な身体を育てる事のほうが意味があると思うのです。

私は、自分の食を管理し、自分の体調を管理して常に免疫能力を高めておく事これが一番の対処方法だと思っています。



— 天岩戸神社 —



— 澄んだ空と山々 —

六道輪廻のお話

宗運道場 弐段準指導員 西坂 毅

2月、3月と立て続けに大好きだった伯父と伯母が亡くなりました。どちらもとても素晴らしい方でした。葬儀の時は涙と共に悲しみがこみ上げ……。人の死は必然ですが寂しいものがあり、人の世は無常であることを痛感させられました。そこで今回は、お坊様の説法を思い出し「六道輪廻」の話をしたいと思います。

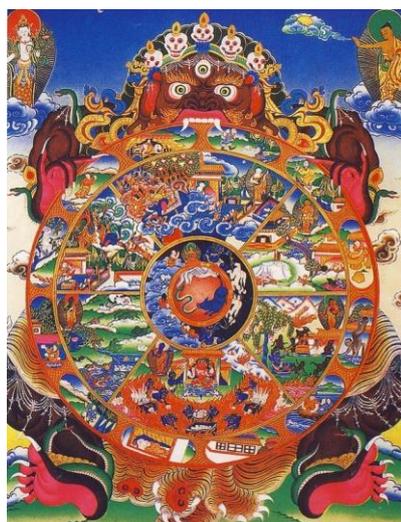
仏教の中で、亡くなった後に目指すところは極楽浄土です。天国ではないことをご存じの方も多いと思いますが、天国は六道の中の世界の一つであります。

地獄道は、最も苦しみの激しい世界です。この世の溶鉱炉の火を地獄に持って行くと、霜か雪のようになってしまうとされます。また、この世の一番の苦しみを一滴の水とするなら、地獄は海の水のような苦しみだとも説かれます。その期間もケタ違いに長い、果てしない苦しみの世界です。

餓鬼道は、飢えと渇きでガリガリにやせ細り、骨と皮になって苦しむ世界です。それでも食べたい物も食べられず、飲みたい物も飲めません。

畜生道とは、動物や鳥、昆虫の世界です。弱肉強食で、自分より強い生き物に突然襲われて食われてしまう理不尽な世界ですので、常に不安に怯えています。

修羅道とは、闘争の激しい世界です。

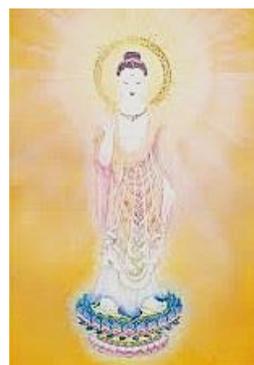


— 六道輪廻の図 —

人道とは、苦しみも楽しみもある私たちの生きている世界です。六道の中で唯一仏法が聞ける可能性があり、仏教を聞けば六道から解脱（げだつ）できます。

天道とは、六道の中では楽しみの多い世界ですが、極楽浄土とは違って、やはり迷いの世界で、悲しみもあり寿命もあります。さらに、年をとってくると、それまで楽しかった分、地獄以上の苦しみを受けます。

「六道輪廻」とは、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天を六道といい、輪廻とは輪のように廻りめぐることです。つまり、六道をグルグル廻る生活です。このように、六道輪廻から離れることを「解脱（げだつ）」といい、この「解脱」こそが、仏教の目的です。それは、生きているときに定まりますので、この世から、いつ死んでも浄土往生間違いないの変わらない幸福になれるのです。



すなわち生きている状態で六道すべてを人は体験している。また生老病死これが必然であり生きていること自体が六道であるとも言い換えられるのではないのでしょうか？

すなわち穏やかに生きることが極楽浄土への近道かもしれません。

大好きだった伯父と伯母の冥福を祈りまして「南無阿弥陀仏」。



— 陽光 —

自然物に宿る不可視の力

宗運道場付き 初段 加地 龍太

地球上に存在する物質に加えて、人類が把握出来ている宇宙空間に存在している物質を含めてすべてが粒子で出来ています。

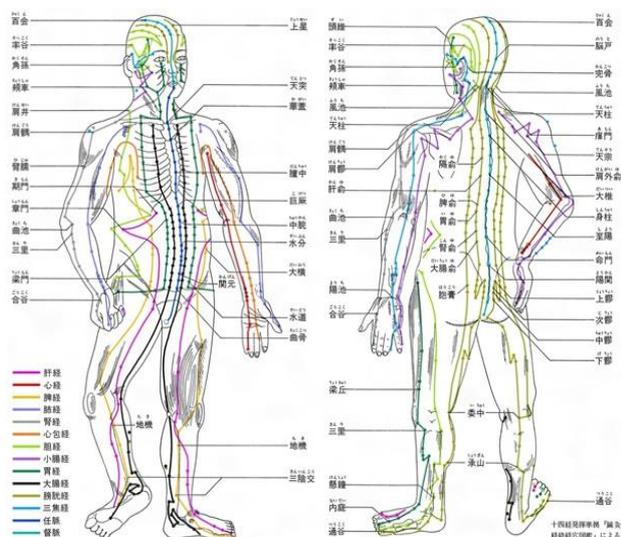
現在の物理学の理解では、粒子の最小単位はクォークとレプトンの二つであり、この二つがこの世と呼ばれる物質の世界に存在する全ての物質の元になっています。

では、クォークとレプトンは何から出来ているかというと、現在の物理学では証明がついていないのですが、個人的には「氣」と呼ばれるエネルギーから出来ているのではないかと推測しています。

東洋医学の世界では、肉体を構成する不可視のエネルギーを「氣」と称します。

その氣が中身として入っていて、流れる通路を「経絡」と称します。

※インドのヨーガの世界では、経絡をナディと称し、氣をプラナーナと称するようです。



— 経絡図 —

経絡は血管やリンパ管と同じく管（くだ）であり、その管が通っている通路のことを指します。その経絡という管の中を流れているエネルギーが「氣」です。この氣には肝経、脾経、腎経などの名称がつけられていますが、臓腑の名称が付けられる前までは単純に「色」で分類分けがされていたと多くの研究者が指摘しています。

肝経は深緑色、脾経は黄土色、腎経は黒色、という

風に色の目安が東洋医学の教科書の一つである五行色体表にも書かれています。

経絡と氣はどちらも非物質ゆえに一般的な人間では肉眼で視認することが出来ません。

しかし、東洋医学と呼ばれる理論体系と技術が生まれたとされる約4000年前の古代の中国人には、その非物質が視えていたと主張する人たちが結構います。

その研究家の人々の主張で共通する点は、「昔の人は現代人に比べて下垂体と松果体の力を上手く使っていた。」という推測です。

下垂体と松果体はどちらも脳の髄質側に存在する箇所ですが、この二つの箇所の力が現代人は極めて弱まっているとされます。

個人的推測ですが、その弱まった原因は自然から離れて文明を作り文明の中で生活するようになったからだと考えます。

文明を作り理性を優先した結果、ヒトが野生動物のときに持っていた野性と本能の力が相対的に弱まってしまったと思えます。

それゆえに現代人には一部の例外を除いて非物質は視えないが昔の人には視えたということになるのだと私は仮説を立てています。

なぜならば下垂体も松果体も脳の髄質に存在し、皮質には存在しません。

脳の皮質は理性的なものを統括し、髄質は本能的なものを統括する箇所が多いと脳の研究で主張されています。

下垂体は科学的に内分泌系（ホルモン系）の指令系統として機能することは証明されています。

下垂体は内分泌系としての器官としては最上位中枢の視床下部と呼ばれる器官の下位中枢として機能します。

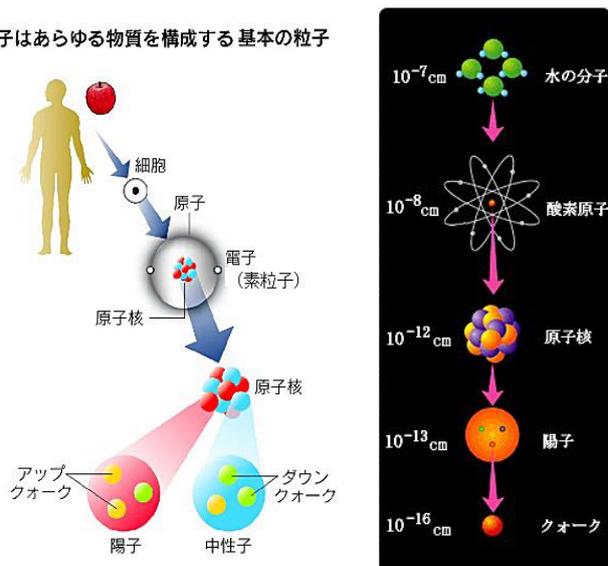
下垂体の物理的位置も視床下部のちょうど下に位置していますので、神経伝達が早めに済むという仕組みです。

松果体については科学的に何のために存在している器官なのか判明していません。

大腸のはじまりである盲腸の最先端である虫垂（この虫垂が炎症する虫垂炎が俗にいう盲腸という病気）も同様に、何のために存在しているのか判明して

いません。
現在の科学力で判明のつかない肉体上の仕組みはまだまだまだたくさんありますが、この科学的に判明がつかない肉体上の仕組みの謎の中に、非物質である経絡と氣の存在の証明をする余地があると思っています。
クォークとレプトンには各世代があり複数の種類が存在しますが、原子の構成素材になる陽子を作るのはクォークの第一世代に相当するアップ・クォークとダウン・クォークです。

素粒子はあらゆる物質を構成する 基本の粒子



アップが二つ、ダウンが一つ、合計三つが結合して陽子が出来ます。
陽子を含めてクォークが三つ以上結合した粒子を化学の世界ではハドロンと呼びます。
ハドロンには色荷と呼ばれる物質が含蓄されており、それが色の元になります。この陽子の中に存在する色荷を持つ亜原子粒子 (原子より小さい粒子の総称) のことをグルーオンと言います。

グルーオンはその量子数で8種類に分けられますが、その種類によって物質の色が決まってきます。
グルーオンその組成に元素を持っていません。なぜならば元素を構成する原子が構成される材料の一つが陽子であり、グルーオンはその陽子の中に存在するものだからです。
それでは、グルーオンや陽子を作っているクォークは何から出来ているのかと考えたとき、私は「氣」だろう…と直感しました。
上記したように、氣は本来は色で分類分けされていたとされています。
昔、非物質である経絡と氣が視えた研究家たちが、

「この色の氣はこの臓腑に影響を与えることが多い」「この色の氣はこの臓腑に一番多く蓄積して集まっている。」などと研究科学し、その臓腑の名前を経絡と氣の名前に当てはめたのが、経絡と氣に臓腑の名称がついた始まりとされます。

私のこの持論を証明する材料となるのが、日頃の臨床の結果となります。
お蔭様でそれなりの評価を頂いておりますが、実際に氣の技術を施すと肉体に影響が出ます。これは「肉体が氣から出来ている。肉体は氣の器。」と主張する東洋医学の原理を証明する一助になっていると考えます。

クォークとレプトンが氣から出来ているからこそ、人間や植物や鉱物などの自然物からはオーラと呼ばれるエネルギーの層が肉体から無意識に放出されるのだと考えます。
私の個人的な知り合いの非物質を見ることの出来る複数の人々も、オーラは有機体無機体問わずに出ていると言います。

この「氣」と呼ばれるエネルギーを武術の世界では生命エネルギーなどの単語で表現していると推測しています。
電磁波とは異なるエネルギーが確実に存在し、そのエネルギーを発生させる「場」が人間 (その他の生命体、無機体すべて含む) だという理解です。
この氣なるエネルギーの存在は、私は自己体験 (右手の親指の炎症がその場で治癒したなど) と自らの臨床結果によって確信しています。

そのエネルギーを武術的に応用しても使えるように、日々形を稽古しています。



— チャクラ (梵: चक्र, chakra) —

昇段 (令和二年度 春期) / Dan Grading (2020 Spring time)

【四段師範代・Yon dan – Shihanndai】

【参段指導員・San dan-Shidoiin】



Nathan Warn
ネイサン ウォーン
Australia Chitokai



Abi Lowe
アビ ローウ
Australia Chitokai



Anna Hayes
アンナ ヘイズ
Australia Chitokai

【弐段・Jyun- shidoiin】



Jed Zavasky
ジェド ザバスキイ
Australia Chitokai



Erin Talbut
エリン タルバト
Australia Chitokai



Rhianna Lyons
リアナ ライオンズ
Australia Chitokai



Kaia Hayes
カイア ヘイズ
Australia Chitokai

【初段・Shodan】



Alex Irvine
アレックス アーヴァイン
Australia Chitokai



Zac Wong
ザック ウォング
Australia Chitokai



Connor Warland
コナー ワーランド
Australia Chitokai



Nicholas Hazel
ニコラス ヘーゼル
Australia Chitokai



Hayley Trives
ヘーレイ トライブズ
Australia Chitokai



Mark Weedon
マーク ウイドン
Australia Chitokai



Ronan Johnson
ローナン ジョンソン
Gray-Bruce, Canada



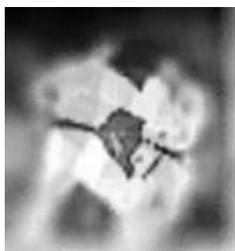
Greg Stroeder
グレッグ ストロエダー
Gray-Bruce, Canada



拳聲

体の中は、広い

越谷道場 師範 山内 博



現代は、急速なテクノロジーの進歩のため、皮肉にも「人間の退化」の時代ではないかと感じます。

人々は、便利なテクノロジーのため、例えば、インターネットで、失敗しないための情報をさがし、「正しい」とお墨付きのついた事のみ集める人、あるいは、目の前の人との“今”という場に心を置かず、どこかの誰かとLINEし、“肉体が居るのに、心づかいの無い”が常態の人など……。

近い将来、車の運転は総て自動になり、人による運転はマニアの趣味になるとか…、医療すらも、ビックデータより答えをさがす方向に向かっていきます。

これでは、自分の判断はいらず、存在自体が誰

とでも換えの聞くパーツだと錯覚してしまいそうです。

昨今の世の中の異常と思われる「人を殺してみたかった」などは、存在感の欠如から、自分の肉体すら感じられず、他人への共感が育たない病んだ精神性の結果ではないでしょうか？だからと言って映画のストーリーにありがちな、テクノロジーを捨て、昔が良いと云う話にはなりません。

そう、現代における空手道の目的感とは、自分自身で肉体を駆使し、肉体を通して精神と向き合い思考錯誤する自由です。

ただ、こう書くと、暑苦しい話に感じますが、簡単に言えば、まだ立ったことのない幼児が、何度も転びながらも、夢中になって、ようやく立ち上がり、「どうだ!!」といわんばかりに笑いかけてくる、あの姿です。答えは、夢中に遊ぶ子供の中にあるのです。

テクノロジーを使うのは人間であり、人間であるためには肉体を手離さないことです。「体の中は、広い」と言った人がいましたが、空手道とは、その広さを認識する方法の一つだと思います。

基本を螺旋に乗せる

武道場が閉鎖になり自主稽古を余儀なくされている今、自分の稽古法が「唐手の道」から外れているような指導を行っていないかを見るため、これまでの稽古映像を「基本」・「形」・「変手法」・「武器術」の四編に分け、最初の基本編・打ち手・受け手・蹴り・運足法についての編集に入るところです。作業をしながらつくづく納得することが、「基礎があつての基本」、「(大地に根を下ろす) 基礎理論武装」、そして、妙な言い回しですが「“基本”は堂々巡りの円の中に置くのではなく、果てしなく伸びていく螺旋の上に乗せて旅をさせる」の三つです。何度も繰り返しますが「基礎」とは、丹田回路に則った「身体操作」、仙骨—脊柱—蝶形骨を結ぶ線で



堂々巡りの円の中



螺旋の上に乗せる

ある体軸線・正中線を保持する「常の袴腰」、氣の運行と意識線を学ぶ「導引術」の効果的な活用、そして「基礎体力運動の継続」の四つです。

尚、各編の映像は個人的な保存資料となるので配信する予定はありません。ただ、技法の解説等で必要になった時あるいは視聴の要望がでた場合は、見てもらえるための準備はしていきたいと考えています。(Editing Keiko images_Sakamoto)



和



龍精空手道季刊誌
龍手/Ryushu

<http://www.ryusei-karate.com/>



忍